



新局玉石童子訓

四



1279
19



新局玉石童子訓卷之二下冊

賞罰路を異りて藝家へ還る

九四郎五金を暗賢小齋を

登時住吉の里長へ峯張来六の上云と職善小註同れて則答稟を。

よも来六は幼稚なる孟林寺の扨従して兄九四郎と同居させ小松人への稟上をゆい

た。父を職善よりて現来六は少年をねむ。武藝の本事はわが。兩個の夜盗を捕

捕り。をれ来六の其の身單也。這而賊を生拘り候と回へ来六は合ての。

小人が親峯張九四藏の兵法武藝を人教て名を知らる者なり。小人の其の大

刀筋と聊字のれも。実昨宵の挿れ助劍の者あり。俺身の武功は、何んか、

公職善點頭て件の二賊を執索見。幸と書き信と見て。其に駝鳥太吹五郎

若們が外、來歴且今様が自殺の。都て孟林寺の住持木と。峯張来六が昔



状不具不載る條々と相違わらぬ其甚だしくと問れて二賊ハ此も疑議甚だ言詰齊
 一公をやう然ハ俺們が命運の盡る処這少年も小戦員て俱ハ痛瘻を負へし生
 捕れてハ何事と云懸て告懇状ハ載れる首伏の事の趣些も相違ハなと云ふ
 職善ハ今様の書簡をぞと云合抗て介らぬ其の書簡ハ今様が自筆を然馬ふ
 在て若們ハ贈ハ是實買る物と問を二賊ハ夢あき開ハ御尋生をもさ告懇状ハ
 明白らぬと云ふ職善又問やう然らぬ這朱之介と十二屋九四郎若們と相識
 ぞ素より鐵屑鍛冶郎の支黨あらと云と問ふと二賊ハ夢あき開ハ勿論ハ
 他若ハ何ぞ支黨ある疑れハ這人々の不幸をそひつめと云ふ職善嗟歎して介
 ら實ハ今様が横死ハ則自投を朱之介が所為と云又九四郎ハ罪負上ハ執至六
 市四摠若ハ赦して放ち返さる者然れども只這二賊の片言とて事忽馬不を
 加む明日又暖簾次若と召よせて相質しく違はぬ實ハ疑を解不足と云朱六木訥

若ハ這旨とて明日又當廳へ参るべ駄鳥太吹五二賊ハ此朱之介ハ執至六市
 四摠若も這儘獄舎へ返さし住吉の里長故老若も都て這意と云ふと最嚴
 宣示して是日の廳へ果しけり却説其詰朝峯張朱六沙弥木訥若ハ住吉の里長故
 老若と俱ハ又浪速の陣館へ來り程ハ浮世代屋暖簾次も當廳へ召よせられて
 今様ハ使せざる兩個の小三板早歌調子と喚做して今茲ハ俱ハ十二三歳を爲を
 相俱考乳守の里長故老若も既ハ局の内ハ在り當下息嶋皆人頼紀美りて兩
 個の強人低杭駝鳥太狸毛吹五郎并ハ末朱之介晴賢十三屋九四郎の老若也
 藝云乾兒六市四摠若も囚牢より牽出させ執索兒若も守りて居り既ゆて二
 好木工頭職善ハ出て公案の上着坐させ召人若ハ皆檐廊の下召よせられて膝
 仍頓首せざる職善列々是を見て先暖簾次ハ向けるや你ハ這駄鳥太と
 吹五郎と認りてをわらざらんと問れて暖簾次頭を拾けて見々敬馬く色もる否

小人こごれの者もの毎ごとと毫ちとも認みりひらきとふ又職善しやくぜんの今様いまさうの書かき同どうを食くひて真ま嶋しま皆みな人ひと不執ぶしやく接つぎせて是これを暖のれん簾れん次れん小見せせてゐる。暖のれん簾れん次れん其書そのふ同どうの今様いまさう自お筆ひ多おほや非あやと向むかれて暖のれん簾れん次れん訝うけりさう。美う戴けさう。ち用もちひて讀よみて愕おど然ろと驚おど筆ひ多おほや非あやと向むかれて暖のれん簾れん次れん訝うけりさう。美う戴けさう。ち用もちひて讀よみて愕おど然ろと驚おど筆ひ多おほや非あやと向むかれて暖のれん簾れん次れん訝うけりさう。美う戴けさう。ち用もちひて讀よみて愕おど然ろと驚おど

て定ま是こ是この仰おほの如ごとく小人こごれが認みりさう今様いまさうの迹あと也なり紛まふもひらきとふの職善しやくぜん冷ひや笑わらて介まは是こ今様いまさうが横死よこじハ則すな自殺じこく也なり朱あけ之の众しゆの所ところ為なるらば知しらば其首そのくび不な牽ひせし駝鳥たつじう太吹五郎たふいごろう有あ驗けん觀かん主しゆ舌した命いのち道人だうじん鐵屑てつせつ鍛冶郎かぢらうが支黨しとう之の休やす他た等らと知しらばとふも曩なれ休やすが鐵屑てつせつ鍛冶郎かぢらう小娼妓せうがぎ今様いまさうと貸かて他郷たけう遣やり時とき隨したが即すな今様いまさうをて他たが哄騙おぼろの媒鳥まいてりと又また駝鳥たつじう太吹五郎たふいごろうが招まりて事こと既すで小發覺せうはつかくたり有あ恠おどれ休やすも鍛冶郎かぢらうの支黨しとうさると分明めい素もとも覚期かくきの上うるべしとひらき暖の簾れん次れん駭おど怖おそれてち戦慄せんりつ陳ちんさう。脚あし錠じやうでひらきも小人こごれ何なにぞ那客なかくの身み入いりてを知しりひえ乳守にゆでの里さと恒例こつれい也なり身み品しん宜よろし熟じゆく人の客かくの所望しやうぼうもて娼妓せうがぎを貸かす。

遊山ゆざん小從せうじゆさうと間ま是こあり今いまより四五稔ごしゆ前まへ比洛北ひらくはく岳倉たけくらの邊へ邊へ今様いまさう許ゆる賜たまさう客かくありて錢せんを使つかうと大おほさう。ち約莫やくばく一稔いつしゆ許ゆると經へて今様いまさうとわく筑つく麻ある。温泉いんすゐ小もんとわかれか其間そのまる身價みんげの思おもひの隨したが小受會せううゑて貸か遣やりひら。今いま稍しやう思おも合あはれ件けんの客かくの鉄屑てつせつ鍛冶郎かぢらうとやらう。ち然しかしと知しらば疎そ忽たちの至いたり今いまちら後悔ごうかい仕つかりぬとひらせも果たまに職善しやくぜんの眼まなこと瞪とらり一聲いっしやう許ゆる立たて里さとの恒例こつれいもて筑麻つくあの温泉いんすゐの信濃しんぬ也なり其路そのみち近ちかくはあらう今様いまさうと貸か遣やり折せ僅わずか小ち兩個ふたごの小三せうさん板いたをのち隨從ずいじゆせし其その甚し麼まも最鳥さいちう辭ことばと叱おどり懲ちやうも暖のれん簾れん次れん折せ俱く一いつちらけ又また那な兩個ふたごの小三せうさん板いた早歌はやか調てう子こと召まりて詞ことばを和なけて詔みことばさう。皇みかどの御ご前まへ今様いまさうと共とも侶りの鍛冶郎かぢらう俱くせられて筑麻つくあの温泉いんすゐの由よし時とき他たが煉金れんきんの計けい較かくも必かなら見みゆもあつらひ匿かくれ告つげらるる。屢しばしば問とて早歌はやか調てう子このをさく合あはる。ち今様いまさうととらひ比ひの奴やつ毎ごとち年とし九ここの秋あき十じゆちるをありて何事なにごとも記臆おぼはる。ち今様いまさうと

思ひ正聊もあらざりて一霎時名との更られて打出見と喚れり
 知るはつりとより一々取捨を伴誑るるを穿てて職善の亦是を詰らむ
 鳥太等ふらち向ひて若們的の年来鍛冶郎が腹心を機密の都て知つらん
 鍛冶郎の始より騙治郎と騙賊と知りて他相譚れて其利の為今様を貸き
 他擲遣せり飲と向き二賊のゆゑを言新しくそ今様を鍛冶郎と死を
 けて誓ひ中るれ竟機密と叫び示して哄騙の囚見不使ひの暖簾次を
 行ひ騙術の洩るとあらざりて開き這浮世袋屋に罪せら見えを益と
 公を職善うちめて暖簾次の鍛冶郎が支黨あつたも他今様を従せし其
 囚見不做ると知りて數日の国房錢をかり利とまぬる罪免るべし兵毎這奴を
 郷を馳鳥太吹五郎と其侶不夙獄舎不敷系むと列に下知不伏兵を心も果は

衝と寄て駭怖る暖簾次の両を并へ換抗々々緊糸く索と被りけり當下
 職善又公を馳鳥太吹五郎暖簾次を猶拷問のまれば開き儘獄舎遣
 去べし又早歌調子も今様相似る其罪をわらねども年尚十五未満也
 且今様に従て鍛冶郎俱せられ其比の猶幼小也善悪邪正を知らざる他
 格別の美を以里長等の預置ん乳守の里長故老毎皆這旨をよかると云渡されて
 阿まざる谷口訥る乳守の衆人怖惑早歌と調子を俱して外面出て美書一
 通を猛可物して呈され身の暇を賜り早歌調子を伴て乳守へ還る程
 吹五馳鳥太暖簾次の執索郎牽立られて囚牢と投て退りけり登時沙弥木
 訥と峯張染六も真嶋皆人羨りて喚登されて檐廊に在り他九四郎の弟
 るれども孟林寺小扈從せる寺院待るが又乙藝六市四摠朱之公一個々々喚
 よせられて並て檐廊の下に在り開か中乙藝六市四摠之公既不縛の索と

鮮鏡されて俱頭と低て居る職善先染六ふら向ひて峯張染六尚少年の小
腕もて二賊と捕捕り一助劍の者ありと云ふ其掙の故とて料の疑を
解くと其功賞を倍れに那身所要る木訥も這旨とて俱歸寺と木
云ふ這邊を具の徳ふべ又乙執六市四摠の二賊吹五郎駝鳥大の招ふも實を
ゆれ九四郎の鐵屑が支黨るらぬ分明九四郎既罪を六若們男女二個の
者も權且も留置くべらんとて放免を任吉る里長故老等も共侶這意を
ゆて九四郎が安執も還るとも俱と當廳へ参る及至只這旨と告知ね獨朱
之双の同からむ他も亦幸罪鮮屍人を免れれども俺の身日回謀見とて大和上
市遣して他が那里不在の仍状と二百金の盤纏のゆも那里人縁で扱を
あ朱之介の東國の一諸侯の愛臣と主君使を奉り大和路へ来て這留程
故めて上市る落葉が女婿小做るものろ那身放蕩を頼めて主君より預未

ゆ沙金二百兩と白布幾百反を賭博の爲喪ひ贖同御る破落戸安保甲
某の謀られて奸淫の罪脱る路を圍守る捕られ落葉が幸く救ひゆ又
那家の養ひの教訓數日詞を盡して御宗他が喪ひる沙金と唐布を買見と
金二百兩を齎して京師遣らると其の正可不知れ但這舊悪のさらむ他
浮室屋止宿の程做せる悪事のある故荷三太怒て追出るとこの粗
はら知又今様が自殺の夜朱之介が旅刀とて吭を刺て死しうける枕と並
臥るが并に愛もたも知らり一寔は鳥崎の白物と云恰と云有はる金野の
鷹眼をの儘鏡して還らる何をて江湖上の歹人を懲るたの故朱之介
大和へ還ると鏡を又京浪速住吉左界小脚を留ると鏡を并に二百兩
せて東へ追放ま死者又量表朱之介九四郎預け金とて乙執が當廳へ差
ゆる百九十五兩の朱之介が盤纏あは素是上市る落葉が沙金と唐布と

買せんも他へ渡與せし要金されぬ必故へ返志。あ故に俺既使を上り遣
 きて件の落葉と召せぬ異日落葉が来る日不這美を以他へ取らん朱六の藝
 里長も皆這旨とあらぬ九四郎傳示ね疑獄不忠誤不水解をほり正公
 一の救びと稱て身の暇を取られぬ大家俱不額衝て唯々と言美あらはは當下
 頼紀聲高か兵毎又蝨く朱之介の谷と中て追立とて劇多下知と傳と執
 索の獄卒を養りぬと心々朱之介の被る索の小を鏡多推伏て答と抗と推
 懲を數の百八煩惱の迷の斯や墮獄の鬼と冥府の呵責目前見るも懲懼は
 執をの痛痛く思へる然而在るべからざれば六市四徳のゆらと朱六木訥里長故
 老皆身の暇と賜ら外面投て退去の介程朱之介の背を推ると二百杖殆苦
 痛の堪され聲と涯り叫ぶのこ遮莫俗云藤身も欲皮破るに至る獄
 卒風く推果て曳起と推居けの登時伏兵兩三名下知ふとて共侶朱之介を

受會て退いて準備多う趕立て出んとま是日浪速の里稍盡處まで俱して追
 放去死為心是より先ふて藝六市四徳の朱六木訥里長俱せられて退りし門
 前ふ歩一か大江杜四郎成勝の柿八を従へて十三屋の隣人及九四郎が乾見櫛工
 みの地の鯨在る者と申乙都て八九名其頭の茶店小待て居り又蝨くし藝六市を
 見申て走の歩皆共侶の鯨て茶店小誘容て歡ひの聲洋々と申一乙勺先
 茶と薦め簞食と食して用多き程木訥は是を推辭て衆人小向ひての
 中師父の待不樂あん小僧の蝨く寺の退りて這欵ひと告稟さん大江峯張の
 格別人嫂々を宿所へ送届けて明日還るといけあうとこのを朱六の宿へ送らわ
 寔ふまゝ係へ嫂の窮既解れぬ俺兄逆旅の留守をれ急ぎて宿所へ送らわ
 要るよの美を師父へ稟一とりの亦杜四郎も木訥も向ひて咱も亦時宜ふ
 よて明日から還らかけれん這美をあらぬゆねと凜心木訥心を去却衆人小



別を告て柿八をぬて遠く孟林寺へかゝる程に住吉の里長故老ももて早
 食と辭ひて還らまへま當下隣人等のひやう。今日の赦免のせよあれは秋の麻衣
 一襲と帯と日傘の主人の宿所を索ふてりて来り被更ぬと袂包を渡せりて
 靴の受戴にて危うける大厄を思ひかけりて大家さの所配會ふ做作り衣の
 又蝨く被更ても顔さへみま垢脂添て久し櫛の齒を容れぬ這頭顱を争何いせ
 んとひと乾見を諾らひて六市が小母の宿所へ這里より十町ふ過だむあや
 時と程さんより那里へ立よりのひさびさ身装の易うせんとの六市四摠等の
 點頭て咱等も如右を思ひえ卒立ぬとのをまを自餘の乾見を推林せぬあ
 正との午の過る皆物發した時候るべし這齋を喫てを左右もまのひねとのひ
 片航て茶博士お茶を請ひ尊食を用ひて里長故老乙共藝いゆら六市四摠を
 首坐四郎米六以下の毎ふふく尊食を引きて社衣る菓子盆の握飯込ふ

世話を焼塩ふ交る胡麻の色見を鹿兒秋斑竹子の延て節立生魚脯の落
 其昆蕒の着染物列衣著添て配り做中酒の壺取合抗て甘ん辛にの堂目て知
 る一口茄子紫の灰後れ糖漬の半分入る庖丁の研離れぬ男同士女一人を
 上客を畫飯既果し乾見櫛工共侶の食籠小盆合斂て裏に袂中
 結の紐一筋千筋の編の麻衣合出せ隣人等の帯さふ乙共藝不締更させり
 卒とさる小皆共侶自身を起し時誰やえ蹴躰茶碗の古水忘れせしと一紙の
 錢を出し茶博士を還して歩日昼流る汗を絞らぬ日社会未未程の程ふ
 遠くもあらぬ六市が小母の宿所へあふければ里長故老隣人乾見櫛工をあらよ
 辭ひて明日又御宿所へ参りて執ひて稟さぬとのひねも誠ある乙共藝四郎米六
 ち小目礼あり各々去向を定て別れけり復説六市が小母丈の世話を喚做る小
 經紀のければの目も又早早の生活の爲不出てのまを還らぬ然る小母の今日六市

額の汗を拭き、
皆さ高くとそをき、これ先這方と華筵と坐席お布て請られ、大家俱お心
傳、袂と拂りお拭をりて各裳の塵埃と拂ひて俱お母屋ふらち登るお四郎乙藝
上坐を茶六六市四摠の程、く左右おゆり、當下屋主の老波先恭しく
藝お向ひて不慮の厄難赦免の飲祝せ、乙藝も云云と四郎茶六六市四摠詞
長は夏の日の炎暑致る東道態お先書、饌と薦んと、いそぐ立まき、小母と
大家急お推禁めて飯の方僅茶店を思ひの隨お喫べり、いそぐ嫂お浴を結
髪をを願ひ、これとふお開い、易らと、庭お雨戸を二枚三枚うち送り、大盥を
おと直ま假浴室汲合る熱湯、二桶水汲入る大柄杓、二三四と入れて、是で加

飯を炊き湯を沸し、他が立
六市四摠共侶お乙藝、杜四郎茶六を先お立し

減の吉岡際、浴衣と生を管待態お卒と、乙藝お薦れ、乙藝の屢お飲を
野邊の石竹植られて成過る盤片と、饒一ぬと簀子の上お衣脱、指て湯お
入れ、老婆お猶精悍しく、袴を拭て、拭を固めて垢脂を搔き、送の口誦果
鄙語お湯の辭、水おやらんと、厭笑六市四摠の身を起し、俺們的掛欄、湯
湯お入る、鬚を剃し、先お男と作えと、小母と喚、銭を借て、拭引提て、出
ゆく程お杜四郎と茶六吹入る風と、待良お柱お身と倚て、憶お二重時打睡り
徳而乙藝お浴、果て櫛笥を借て梳る有敷系、小長お雲髪、乱れ苦お夏、憂を
今も稍解水櫛お櫛下し、又拵着て、小指お膝、髻結の締り心も夏の日お流る、腕
油厭しく、照を鏡お水髪、淡お時を移し、結髪も亦果おけり、當下主の老婆、
土瓶の素湯お茶と入れて、盧生お枕をぬき、碟子お儲の粟餅を装、四郎茶
六をも、喚覚し、乙藝、次第お煎茶と薦る程、六市四摠お浴、結髪を

かの来ぬればおつけ藝の圓坐まわ召入れておつ主の老婢おつ教びおつと舒おつておつふやうおつのそでおつ家子おつ還
 るおつも良人おつの長おつ旅宿おつを信おつじおつきおつつおつるおつにおつ悦おつむおつるおつはおつりおつもおつ多おつかりおつ榮おつるおつ宿おつりおつりおつ
 いおつりおつ比おつりおつ稍おつ久おつくおつ近おつにおつ邊おつの人おつがおつ厄おつ會おつ被おつておつ守おつらおつくおつとおつ知おつるおつ自おつらおつとおつ在おつるおつもおつはおつらおつ
 日おつ陰おつの程おつよりおつ出来おつしおつ宿おつ所おつへおつ還おつりおつはおつらおつべおつしおつ御おつ庇おつふおつらおつておつ浴おつ者おつ髪おつさおつへおつ結おつておつはおつらおつらおつ
 ておつの外おつ看おつたおつやおつらおつ小おつ父おつの還おつりおつぬおつひおつるおつ六おつ市おつもおつもおつ恙おつなくおつ赦おつ免おつせおつられおつぬおつはおつらおつ宜おつくおつ直おつしおつ玉おつ
 ひおつねおつといおつふおつ老おつ婢おつの禁おつ難おつておつ开おつらおつ其おつ該おつでおつはおつれおつもおつ日おつの尚おつ未おつのおつ時おつ候おつらおつ今おつ一おつ霎おつ時おつ候おつせおつ
 るおつ夕おつ饑おつとおつそおつもおつわおつらおつはおつれおつとおつとおつ四おつ郎おつとおつ末おつ六おつとおつ側おつ聞おつしおつ俱おつふおつらおつとおつ嫂おつのおつ量おつ間おつ
 寔おつ不好おつ五おつ保おつ子おつの留おつ守おつせおつらおつくおつ小おつ幾おつもおつ欲おつ這おつ里おつ在おつるおつ卒おつ立おつ更おつといおつそおつ各おつ六おつ市おつもおつ
 禁おつめおつあおつせおつ敗おつらおつ菅おつ笠おつ兩おつ箇おつもおつ索おつ小おつもおつ其おつ一おつ箇おつとおつ四おつ摠おつのおつ遞おつ與おつしおつ先おつ小おつ立おつらおつ
 乙おつ藝おつ云おつの猶おつもおつ老おつ婢おつの教おつびおつとおつ舒おつておつ身おつをおつ起おつせおつ杜おつ四おつ郎おつとおつ末おつ六おつのおつ詞おつをおつ添おつへおつ青おつ傘おつをおつ
 乙おつ藝おつの遞おつ與おつしおつ各おつ菅おつ笠おつ引おつ提おつておつ皆おつ共おつ侶おつふおつらおつとおつ目おつ送おつらおつ王おつの妻おつ四おつ摠おつもおつ亦おつ

別おつをおつ告おつるおつ詞おつ短おつ死おつ笠おつの紐おつ引おつ伸おつしおつ俱おつふおつけおつりおつ却おつ説おつ乙おつ藝おつの四おつ郎おつ末おつ六おつ兩おつ四おつ摠おつの送おつ
 らおつれておつ俺おつ宿おつのおつ交おつりおつ来おつぬおつれおつ思おつふおつ中おつもおつ似おつせおつ店おつの檐おつ下おつ生おつ平おつのおつ妻おつとおつ屋おつとおつ深おつ做おつらおつ暖おつ簾おつとおつ
 掛おつ耳おつしおつておつありおつ訝おつらおつらおつ内おつ入おつるおつ程おつもおつ兩おつ隣おつのおつ老おつ婢おつがおつ莞おつ尔おつやおつふおつ立おつ迎おつておつあるおつ乙おつ藝おつの思おつ
 ひおつよりおつ然おつらおつるおつ牢おつ癩おつもおつるおつ還おつりおつせおつぬおつ愛おつさおつまおつ六おつ市おつ四おつ摠おつ兩おつ哥おつもおつ幸おつはおつ日おつ目おつおおつ遇おつひおつぬおつ
 ひおつけんおつ孟おつ林おつ寺おつのおつ刀おつ祢おつ達おつもおつ炎おつ暑おつ敷おつでおつ由おつ苦おつ勞おつやおつといおつとおつ喋おつ々おつもおつ慰おつめおつておつ乙おつ藝おつがおつ右おつとおつりおつ
 左おつもおつ扇おつの團おつ扇おつもおつ深おつ草おつやおつ鶴おつの床おつの對おつをおつ思おつふおつ乙おつ藝おつの四おつ下おつとおつ見おつえおつるおつ料おつらおつらおつるおつ福おつ
 つおつ鬼おつの祟おつはおつ俺おつとおつあおつらおつるおつ皆おつさおつ備おつふおつまおつうおつ由おつ苦おつ勞おつとおつ被おつるおつとおつ夢おつておつぬおつ心おつ苦おつくおつゆおつらおつまおつ
 稍おつ厄おつ解おつておつ還おつされおつらおつ一おつ向おつ留おつ守おつとおつあおつひおつけおつるおつ人おつ達おつの在おつらおつるおつとおつ向おつけおつ老おつ婢おつをおつ各おつのおつ言おつらおつらおつ
 然おつらおつ五おつ保おつ達おつの送おつ代おつりおつふおつ二おつ人おつ宛おつ今おつ朝おつまでおつふおつ在おつせおつらおつ奴おつ家おつ毎おつがおつ来おつぬおつらおつふおつらおつ剛おつ牙おつ
 出おつておつ由おつたおつぬおつ今おつ日おつの此おつ上おつるおつ日おつ吉おつ日おつんおつけんおつ斯おつらおつ揃おつておつ還おつらおつるおつ赦おつ免おつの教おつびおつのおつ言おつらおつらおつ
 已おつの比おつ及おつふおつ九おつ四おつ郎おつ主おつがおつ安おつ藝おつの還おつりおつぬおつ然おつらおつはおつ這おつ回おつの禍おつ事おつとおつ今おつ日おつ由おつ赦おつ免おつはおつらおつ

あり初て知らず其驚はた大なるを又秋ひも一入先や里長以下の母故老は
 五保の礼堂をえそそ儘小かて一御を巡りて還りぬる午の時候に故
 庵厨儲と奴家毎が漏れて俱に死身を待程の主の疲勞不堪をうけ納戸
 退て假寐をそそむるを告るふ其藝の合笑てその秋がた涯りたり然わん
 と知るよりも幾日もある垢脂添て海松の像ふ極無し髪を儘結も其
 還りぬるに六市小母の宿所を憶を時を得る悔多きをこら陪
 話れ四郎末六の折らん六市四摠も秋ひて折らん大哥の歸御あり水母の骨のあ
 心地多て斯秋はれぬる喚覚え秋と散動なる聲小九四郎の目覚めけり咳
 けり間も重紙戸開てそそ其頭程と坐と占てさ比自恙をこら腹子よ
 其首の端近う這方へ找とぬる四郎と心とあつて其藝末六共信の折小
 幸ある歸寧と大厄解し秋ひを云云といふも九四郎はさあ否酒家の齋あり

久と軀て里長刀袷の中故老達も逢て具の少知りなり又只其吉又のさるる血
 林寺の木訥法師が陣館より夏果て還る路で出會ひか腹子と末六が武勇
 梓の鐵屑とあらが支黨る二賊を輒く生拘て竟に疑獄を解けし其顛
 末のへゆえ柿八老奴が話説を肇て知られ大和の落葉とやら信老實
 嗚り毎不感嘆せられて又いづもあらざる是成就も好からぬ朱之成を浮薄の本
 性人の形貌小らぬ者そ女やて見まり艶治郎るられ俺救ふ他を留め薄
 情や事を惹きかれ俺思ひ足らざる行なるを幸何せん遮莫と執る六市四摠も命
 芽出でかへる果は是切てめ秋ひに却俺嚴嶋詣を料も昨今も長旅小做し
 故の治比の御小立より大人元を小見参をれん約莫是等の秘事ハ四郎腹子の所
 要あれども開ら後小を告票さむといふ傍と見かて喃呖振達詭を酒樽
 今そ出ぬるやとふふ兩個の隣妻の心を共侶小軀て庵漏退て酒樽

末男。坐著酒菜の二種と三脚有り。吸物膳と一個々々措居ると六市四摠の執
 接て似ける酌と合船や船切の蕎麥の後段まで先酒盃と合揚る主人の一度を
 首ぞ強飲も沙量も推並て送ふさう瑣小鮮の蟾子の初ひとれるらでかろ末男ける
 俺夫子の恙るる一飲いと又俺妹子も幸小冤屈の罪免れ其壽の酒祝ひ愛と轉と
 飲ひ不過中更をのいも出うち夢も多時程るを送小醉を盡しけり。當下又九四郎の
 執云末六等うち向いて夢が如た那朱之众の其性善らぬ者有らば果と福と醸
 せよ。乙執云六市四摠と連累の祟あり。開の疑獄の所以なり。他もみづから作す
 らる然ると乙執云六市四摠の厄解て赦あり。小他の單鞭撻れて大和の返さ
 れど。七儘追放せられ。八舊悪の咎とも最不幸とらひ。他百九十五金と没官
 られて。總一文の盤纏も他御へ追も放され。必路頭も立。人俺救ふ他と留めて
 今其窮厄を救ひ。始めて終る。何をて使者とられん。末六は。大受。是れ。他を

赶上。とのひ々懐る。長財囊より圓金五兩を數し。是を末六の遊興と以
 ち。俺意。小那社。校の必浪速の御稍盡。是も。伏兵達。俱せ。追放。わあ。ん
 ざら。八彦。太郎。の。這方。まで。赶上。せ。逢。とも。わらん。飲。れ。も。時。既。後。れ。及。び。か。こ。を
 それ。ま。へ。備。幸。小。遠。く。去。り。他。終。立。て。其。頭。在。り。汝。と。俺。意。と。活。へ。其。金。子。を
 路。費。取。せ。と。ろ。り。と。六。市。四。摠。も。う。ち。で。然。ら。ば。咱。も。俱。書。え
 捷。徑。と。も。あ。る。れ。と。喘。る。と。末。六。推。禁。せ。日。ね。和。主。等。の。既。大。く。醉。さ。俱。一。路。の
 障。あ。る。ら。ん。と。六。市。四。摠。も。う。ち。も。果。さ。ら。ら。笑。て。末。公。其。美。心。安。れ。お。我。程
 も。さ。夕。風。吹。醒。さ。れ。て。走。る。勢。生。平。の。増。進。し。い。い。つ。も。裳。と。裳。と。出。さ。さ。る。を
 九。四。郎。ヤ。ヤ。と。喚。返。し。若。們。醉。狂。る。俱。あ。ら。も。末。六。小。信。と。徒。を。行。ま。る。と。い。ふ
 乙。執。も。杜。四。郎。も。心。と。屬。開。が。程。末。六。の。件。の。金。子。と。懷。末。六。と。夾。せ。外。套。と。腰。と。披。こ
 両。刀。と。名。く。帶。做。て。率。走。一。走。お。り。と。末。六。と。い。ふ。航。て。外。出。て。脚。半。草。履。穿。か。す。も

心急迫る夏の日暮れぬ程中と出てゆく勢ひ奔馬も異なるわが六市四柳の丘に
 脚を駐めもあま後れども喘々を従ひける。あ時暑歌はて晴時中做一か西隣の
 老波共ふく運ぶ不盤盤を送る。庭遍へ退けて。乙藝藝も向ひてはる。収家毎に暇を
 賜りて明日の炊火も致さず。汗流の湯をも沸して思ひにけり。柳食饌の御款待も與り
 竹のたふし共藝も九四郎も共侶も芳く好御補助もされこそ。も濡さ内祝の酒
 盃を済し。され明日へ又主連を招きて薄酒をまらまら。宜く稟一のひと。とふ。兩個は
 隣妻の志とあ。身を起して左右の宿所へ還りける。悠而四下外人存れ。九四郎は恭く。杜
 四郎もうち向ひて和子今こそ。あ。小可安藝へ赴く。今茲初旅も元自。嚴嶋詣り。内
 なる。の。治比へ立も。大人。お見参せま。り。講殿計。相別。て。單那里。推参。ま
 ける。大人へ果して。還棄。る。九四郎も。と。先。一。兩。日。憩。せ。て。縁。木。拜。見。と。饒。ぬ。ひ
 けり。折々。大人。の。風。濕。の。疾。病。あり。る。れ。も。大。病。る。さ。れ。ば。病。林。に。在。る。が。小。可。を。近。く。召

さそ。うち。相譚。せ。ぬ。ひ。ぬ。是。兼。不。別。れ。ま。り。と。十。稔。有。餘。過。り。と。云。云。と。生。口。ま。り。ふ
 俺二親九四郎の身故り。の。女。兄。億。祿。の。短。命。也。支。皆。画。餅。不。る。元。自。和。子。を。り。ん。と
 健。小。生。育。ぬ。る。米。六。を。傳。ま。り。て。孟。林。寺。へ。寓。居。の。木。隱。和。尚。遷。化。の。夏。後。任。本
 玄。道。德。の。老。實。迷。教。不。背。さ。り。和。子。の。才。幹。文。学。武。藝。志。厚。か。る。り。ま。詳。し
 告。宣。志。が。大人。の。ゆ。り。或。飲。ひ。或。ら。ち。歎。に。ぬ。いて。敬。篤。に。亦。大。さ。る。り。這。里。中。も
 悠。る。支。あり。と。告。さ。る。ぬ。を。兼。る。ふ。和。子。の。大。兄。備。中。新。司。與。元。君。の。不。幸。短。命。也。
 三。稔。前。不。世。と。去。り。ぬ。い。ぬ。息。憂。の。口。の。の。の。の。と。與。元。主。の。家。子。る。幸。松。君。も。四。五。歳
 也。果。敢。る。く。賜。さ。る。ぬ。ひ。ぬ。與。元。主。の。母。上。續。江。御。歎。に。ぬ。是。も。亦。去。歳
 の。秋。景。茶。の。黄。泉。に。赴。た。ぬ。ぬ。る。れ。も。和。子。の。兩。兄。太。郎。君。龍。二。郎。君。細。の。俱。も。恙。あ
 る。と。る。既。小。長。と。成。ぬ。ひ。が。小。可。御。目。を。賜。り。と。和。子。の。上。さ。入。叮。嚀。不。問。せ。ぬ。ぬ。合。さ。る。り
 ぬ。當。日。大人。の。宣。ふ。ち。相。別。し。と。り。十。餘。年。這。里。中。も。亦。其。方。也。鬼。籍。入。る。者。三



かりける老少不定の世の夢今戦國の時とて俺一筆の雁書を惜みて四郎が安否を
 問せらるるあわらぬ其故の西七國の守大内義興と王世と去りしより嫡子義隆少年るれ
 位人稍時とて賢者と遠離忠臣と諂と人を損ふ間是あり俺那家の被官
 するれども附庸に似たり小身なれに従ひざることをいふとて近曾い仕と歌の謹慎を
 宗とて遠く使れとせざるも遮莫荆婦の世は在り日他は音就中基細も告
 示して四郎億禄を母と子の上下ありはせやう其頭小障りあるとて荆婦の臨終も
 四郎の對面をがを遣憾いと不憚りたる況音就基細のさうくも思ふべけれ然る俺
 荆婦のしるし億禄の年尚二十不足ら黄泉の客ふ作りあせ今初て知る慨し俺年
 年小衰へて病苦かの如く身小添は魂氣必長かたる故の再會と四郎の契りも
 ぬぞ和郎俺為不言傳せし四郎の民間生出て且寺院不寓居をぬれ縦武藝の志ありとも
 竟も緇流の化せられて佛意の導のやせん今も好時候に茶六と共侶の孟林寺と辨

去去りて武者修りて諸困る豪傑の交りて次貞助と承承とて其ま百足は其
 死して仆れざる者杖助も其よりて其も他尊大身と死し必人小疎るべし然れ汝弟兄の
 四郎が外叔父をれも茶六と四郎を増さる僅小二歳の兄をさるやあやめて王僕の尊卑と
 公とて俱同胞兄弟の思ひと做して是は貞助の創せし竟も武功と做すわん其成功を
 家裏めてその地小来て兄音就と輔佐て地を開くあり大孝順といふべし這を
 四郎の徳とて宣ふ聲も惱しげぞ病苦堪見えあへ慰難は唯々とたろふ言承
 承退て却而三日を経て立去らる欲せし大人の別を惜みて一日とて留めあふ
 太郎君二郎君も俱小孝順いけれ朝夕枕方脚方小ゆるて慰め詞敵小可とも日
 毎小召させて放ちるるもあはれは憶は留久しるるて三伏の夏園を俺家の
 和子のま心小樹らざるあはれ辱身の暇とて宣ふま大人小竟も林小難て看病小
 侍る女房小吩咐て鐘檻小藏措れらる金二裏合をさるて开し小可小流遊とて且

の小児を憐れし真元の氣を補養して漸々胎毒を下し蟲を平治物驚き致し止まらざる根
 を強く成長の後記憶をよくする疑ひあり元來無病延命ありと人と思ふ大願之禱
 を先祖の代より當今子孫の世に傳へて古く世上小知らざる此妙薬故猶まき普く弘めん
 絶ふ小功能のありし故告はりしるるありぬ必ある利欲のためふる賣業と賤められ
 小児の病の苦痛を救ひ壯健長壽の喜悦を與えぬ後
 主治 ○五臓六腑の病 ○痰喘 ○疳積 ○疝氣 ○疔瘡 ○癰疽 ○疔毒 ○疔瘡 ○疔毒 ○疔瘡
 大畧 此外の諸症小児の万病に
 武州埼玉郡加須町

御製免製藥所 小兒科 大和氏門司法橋精製

京都堀河六通下町 吉野屋勘兵衛	江戸横山町二丁目 松本屋長藏	尾州名古屋屋舟入町 中屋久兵衛	江州日野大久保町 西村市右衛門
大坂心齋橋通博愛町 河内屋茂兵衛	同日本橋室町三丁目 鐵屋八衛門	奥州仙臺大町 熊谷屋善兵衛	下総佐原橋本 正文堂利兵衛
東都大傳馬町三丁目 丁子屋正兵衛	同本郷二丁目 太田屋盛兵衛	上州桐生五丁目 石井五右衛門	勢州東名光町 日野屋藤兵衛
	同小舟町一丁目 大坂屋太助	信州上田柳町 盧田屋佐久助	東海道掛川十五町 三原屋清助

清香 梅の雪
 奇藥 包七二孔
 第一酒の毒消小
 治癒すは神中尺山あり
 治癒すは神中尺山あり
 治癒すは神中尺山あり

花橋
 六十四銅
 賣弘町 江都大傳馬町
 丁子屋平兵衛

